

OA誌が増えたら？ 変わることと変わらないこと

Continuity and Change in an Increasingly OA journal

小野 亘(一橋大学附属図書館)

Wataru ONO (Hitotsubashi University Library)

第6回 SPARC Japan セミナー2012

「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わる
のか～図書館のためのオープンアクセス講座～」



私の立ち位置

- 一橋大学附属図書館
 - 社会科学の単科大学
 - 中規模大学： FTE5,000強
 - 日本語で日本について研究している研究者も多い
 - EJパッケージはE社SDのみ
- ∴ OA誌の最先端動向からは、ちょっと距離がある。

OA誌が増えても変わらないこと



OA誌の限界を補完するために

- Toll AccessのEJや冊子のカレント契約は維持せざるを得ない
 - Embargoがある: やっぱりカレントに読みたい
 - 古いところはOA化されにくい: Backfileが必要
 - 著者版なら読める: やはり出版社版が読みたい



OA誌が増えて変わること



図書館予算の“リダイレクト”

- 資料費(購読費)や製本費の多くの部分がOAの維持に転換される
 - 論文処理料金(Article Processing Charge ; APC)
 - デポジットシステム(リポジトリなど)の維持費
- 図書館はOAインフラの維持・発展に中心的に関われるか？



研究大学の支出は増える

- 購読料という形で広く薄く負担されていたものが、APCという形で狭く厚い負担になる
 - 研究活動が活発なほど支出が増える
- 大学としては、その分「評価」という見返りが増えればよいが
 - 結果としての資金獲得という“ゲームのルール”に図書館が参加できるか？



契約がない

- (読むだけなら) 契約というトリガーがないので、今何が見られるか分からない。
 - もろもろの異動・インシデント等の連絡がない
 - OA誌≠フリー誌、ではあるが、管理面では似たような状況？



目録はとらない？

- ナレッジベースとディスカバリ
- 個々の図書館での目録作業ではなく、中央集約的な作業が必要
 - ただし、人(国、NII、NDL・・・)まかせでは進まない
 - JIR Naviのメンテナンス体制の整備が必要？
 - NIIのERDBプロジェクトに期待



ILLはなくなる？

- 最後の手段としてのILLや他機関でのWalk in Use は残る
 - 激減する
 - 互惠主義ではなくドキュメントサプライセンター化するかも。



OA誌が経営破綻したら？

- そのタイトルは購読モデルに戻る？
- 過去のOA発行分はOAを維持したい
 - バックアップ/保存は図書館界として取り組む
 - CLOCKSS など

